『誘惑と試練』　ヤコブの手紙1章 1～18 節

I.　概要

今日から「ヤコブの手紙」を学んでいきます。この手紙は、聖書の分類で言うと、書簡といわれるものの一つです。それはある特定の教会のキリスト者に宛てた、というものではなくて、一般のキリスト者に当てはまるように書かれたものであるということです。その意味では、非常に読みやすいということが言えると思います。

1 節に「**神と主イエス・キリストのしもべヤコブが、離散している十二部族にあいさつを送ります。**」とあります。この手紙は誰が書いたのか、ということですが、表題の通りヤコブが書いたという説が一般的です。但し、聖書にヤコブという人は何人も出てきて、この人物は 12 使徒のヤコブではありません。主の兄弟ヤコブ、つまりイエス様の弟になります。イエス様が、この地上で歩んでいる時には信じませんでした。しかしイエス様が十字架にかかり、死なれ、三日目によみがえり、天に昇り、聖霊が下った時からヤコブもイエス様を救い主と信じる群れに加わったのです。

使徒の働き 15 章 13～21 節を見ると初代教会では、ヤコブはとても重要なリーダーとしての役割を果しました。ヤコブは、この手紙を国外に散ったユダヤ人キリスト者に宛てた励ましの手紙です。私たちはお互いに励ましが必要としています。教会にやって来て一番欲しいものは励ましです。また、慰められた後、どのように生きたら良いかの方向性です。

また、信仰によって救われるという、その信仰が強調されるあまり信仰の理解にアンバランスが生じて来ました。だからそのアンバランスを矯正する必要がありました。パウロの説いた信仰義認の教理を誤解して、信仰があれば善い行いをしなくてもいいと主張する人々に、正しい福音を教えるのです。また、ある人々はこの世の流れに流されてしまっている状態でした。そこでヤコブは信仰の中にいる人を励まし、正しい信仰というのが何なのかを教え、世俗的な生き方から彼らを救い上げるためにこの手紙を書きました。

II.　誘惑と試練

この 1 章では、18 節を境として二つの誤解を正しています。本日は、前半の「試練」と「誘惑」について学んで行きます。2～18 節で、ヤコブは二つのタイプの連鎖反応を私たちに提示しています。それらは肯定的な連鎖反応（2～4 節）と否定的な連鎖反応（14～15 節）です。私たちが自らの生活を深く考える時、はたしてどちらの連鎖反応が起きていることに気づくのでしょうか。選択肢は次の二つです。①試練⇒忍耐⇒完全性　②誘惑⇒欲望⇒罪⇒死

1.　試練を喜べ

2 節に「**私の兄弟たち。様々な試練にあうときはいつでも、この上もない喜びと思いなさい。**」とあります。英訳の中には「試練がやって来た時には、親友がやって来たかのように喜び迎えなさい」とあります。「試練」がこの上ない「喜び」に、なぜ、そういうことになるのでしょう？とても喜びとは思えない、というのが試練に出会ったときの私たちの気持ではないでしょうか。私たちの人生には苦しみや困難がつきものです。そういったことに私たちはできる限り出会いたくないというのが本音でしょう。しかし、私たちの気持に関係なく、私たちは苦しみや困難に出会わされます。その時、私たちは愚痴をこぼしたくなる。誰かに、何かに八つ当たりしたくなる。投げやりになることもあります。心が折れて絶望しそうになる。苦しみや困難は、私たちをそのような人生態度へと誘惑します。そのように人生の誘惑にもなり得る苦しみや困難を「試練」として忍耐できるとしたら、それは人生における苦しみや困難の意味を知っている時です。

なぜ、そのような「試練」を喜びとして迎えたら良いのかを 3～5 節に「**あなたがたが知っているとおり、信仰が試されると忍耐が生まれます。その忍耐を完全に働かせなさい。そうすれば、あなたがたは何一つ欠けたところのない、成熟した、完全な者となります。あなたがたのうちに、知恵に欠けている人がいるなら、その人は、だれにでも惜しみなく、とがめることなく与えてくださる神に求めなさい。そうすれば与えられます。**」と書かれています。苦しみや困難とは何でしょうか？ それは「**信仰が試される**」ことだと語ります。神を信じるか、それとも疑うか、

信仰が試されるのです。私たちは、特に何事もなく、順調に生きている時には、神を信じることは比較的容易でしょう。しかし、信仰が問われるのは、苦しみや困難といった人生の逆風の時です。

2. 成熟した完全な者に

しかし、私たちにやって来る「試練」は、実は私を神に近づけ、神に近づいた人を更に成長させる神の方法だということを私たちは知らなければなりません。それは、神が私たちに与えようとしておられる最高のものなのです。しかも、これはヤコブだけが言っていることではなく、新約聖書全体を見ても、迫害を喜べ、「試練」を喜べということが繰り返し語られます。いったいどういう理由で「試練」を喜ぶことができるのでしょうか？そこには二つの理由があります。

① 大いなる報い

その一つは、イエス様のために苦しみを受けることには大きな報いがあるというものです。イエス様は、マタイの福音書 5 章 10～12 節で「**義のために迫害されている者は幸いです。天の御国はその人たちのものだからです。わたしのために人々があなたがたをののしり、迫害し、ありもしないことで悪口を浴びせるとき、あなたがたは幸いです。喜びなさい。大いに喜びなさい。天においてあなたがたの報いは大きいのですから。あなたがたより前にいた預言者たちを、人々は同じように迫害したのです。**」と言われました。また、ペテロもペテロ第一 4 章 12～13 節で「**愛する者たち。あなたがたを試みるためにあなたがたの間で燃えさかる試練を、何か思いがけないことが起こったかのように、不審に思ってはいけません。むしろ、キリストの苦難にあずかればあずかるほど、いっそう喜びなさい。キリストの栄光が現れるときにも、歓喜にあふれて喜ぶためです。**」と言っています。このように、キリストのために苦しむ者には大きな報いが約束されている、だから喜びなさい、と教えられています。

② 成長のため

新約聖書には、もう一つの理由も語られます。それがより一般的なもので、キリスト者以外のすべての人にも納得できるような、普遍的な理由です。人間は、「試練」に会うことで成長するのです。

詩篇 119 篇 71 節には、「**苦しみにあったことは私にとって幸せでした。それにより私はあなたのおきてを学びました。**」とあります。確かに、人間の成長のためには苦しみは不可欠です。なぜなら私たちは自分が苦しむことで、他人の苦しみにも共感できるようになるからです。ですから苦難に遭うことは、人間性の成長にはどうしても必要だと言えます。ヤコブも、「試練」に対する忍耐がその人を成長させる、と語っています。

「試練」は神から与えられるもので、「試練」によって忍耐が生まれ、完全な者へと成長します。成長するためには知恵が必要です。もし知恵にかけているなら、惜しみなく与えて下さる神に疑わずに願い求めましょう。そのように私たちも「試練」を喜んで迎えなければいけません。なぜなら、4 節に「**その忍耐を完全に働かせなさい。そうすれば、あなたがたは何一つ欠けたところのない、成熟した、完全な者となります。**」とある通りです。

3. 心の安定

5～8 節に「**あなたがたのうちに、知恵に欠けている人がいるなら、その人は、だれにでも惜しみなく、とがめることなく与えてくださる神に求めなさい。そうすれば与えられます。ただし、少しも疑わずに、信じて求めなさい。疑う人は、風に吹かれて揺れ動く、海の大波のようです。その人は、主から何かをいただけると思ってはなりません。そういう人は二心を抱く者で、歩む道すべてにおいて心が定まっていないからです。**」とあります。嵐に吹かれた時の港の様子を想像して見て下さい。風と波に船は揺れます。けれども、そのために流されたり、沈んだりしないように、港にロープでつなぎ、しっかりと固定します。ところが、これが海の上だったらどうなるでしょう。風と波に揺られて、どこまで流されるか分からない。あるいは転覆し、沈んでしまうかも知れません。私たちの心は、この船のようなものです。風と波に揺れ動く。人生の嵐に苦しみ悩むのです。けれども、同じ揺れ動くのでも、何もない海上で揺れ動くのと、港の中で揺れ動くのとでは、意味が違います。人生の安定感が違います。イエス様を

信じる信仰とは、この港のようなものです。心が苦悩に揺れ動くことがあっても絶望はしない。心は折れない。なぜなら、人生を導くイエス様を信じているからです。

そしてそれが、心が定まっている、ということなのです。8節にある「**心が定まっていない**」というのは、人生に港がない状態、信仰によって守られ支えられていない状態を言うのだと思います。信仰によってイエス様と、太く切れないロープでつながっているならば、私たちの心は定まっていると言えます。

「定まる」の言い換えは、「確かになる」「確実になる」「明確になる」などとありますが、つまり「安定する」ということです。人生全体の「**歩む道すべてにおいて心が**」安定するということです。「安定」とは、人生が揺れ動かないこと、心が動揺しないことを言うのではありません。揺れ動いても沈まない。苦しみ悩んでも希望を失わない。希望の故に心が折れない。それが「安定」ということだと思います。人生には困難や苦しみが起こります。悪魔は、それによって私たちの心を折ろうとします。絶望へと「誘惑」します。しかし、イエス様はこの機会に私たちの信仰をお試しになります。それは、イエス様からすれば、私たちの信仰が生きる力になっているかどうかをチェックし、より一層の「安定」を与えるためです。

4. 試みとは

ところで「主の祈り」には「**私たちを試みにあわせないで、悪からお救いください。**」という祈りがありますが、この「**試み**」とは「誘惑」のことなのでしょうか、それとも「試練」のことなのでしょうか。「試練」は信仰者を訓育する肯定的なものですが、「誘惑」はそれとは反対に信仰者に傷を負わせる否定的なものです。また、信仰者にとって「誘惑」は遠ざけるべきものですが、「試練」は避けることができないし、また避けるべきものでもありません。はたして信仰者は「誘惑」あるいは「試練」からいつ逃げ去るべきであり、またいつ反対するべきなのでしょうか。先ほど述べた二つの連鎖反応に共通して言えることは、先に進めば進むほどそれを停止させることがよりいっそう難しくなっていくという点です。

「試練」と「誘惑」を混同している人の答えが記されています。13 節に「**だれでも誘惑されているとき、神に誘惑されていると言ってはいけません。神は悪に誘惑されることのない方であり、ご自分でだれかを誘惑することもありません。**」とあります。この節は「誘惑は神からくる」と考える人々が当時いたことを示しています。しかし、このような考え方には「神が私を弱い者として創造なさったせいで私は罪を犯すのだし、それに対して何をしてみたところで結局は無駄である」というあきらめが含まれているように思えます。確かに「**試みる者**」（すなわち悪魔）もまた全能なる神の権威の下に服している存在です。とはいえ、私たち人間は自らの罪の堕落を神のせいにすることはできないのです。

コリント第一 10 章 13 節に「**あなたがたが経験した試練はみな、人の知らないものではありません。神は真実な方です。あなたがたを耐えられない試練にあわせることはなさいません。むしろ、耐えられるように、試練とともに脱出の道も備えていてくださいます。**」とあります。この節にあるように、もしも私たちが「誘惑」あるいは「試練」から逃れたいと願うならば、神は私たちが「誘惑」あるいは「試練」から逃れ出るようにしてくださるのです。

10～11 節に「**富んでいる人は、自分が低くされることを誇りとしなさい。富んでいる人は草の花のように過ぎ去って行くのです。太陽が昇って炎熱をもたらすと、草を枯らします。すると花は落ち、美しい姿は失われます。そのように、富んでいる人も旅路の途中で消えて行くのです。**」とあるようにイスラエルでは、雨の降る季節から乾燥した季節に移り変わると突如風向きが変わるのです。地中海から吹いて来た風が、逆の風になり、太陽が熱風を伴って昇って来るのです。熱風とは砂漠の方から吹いて来るのです。砂漠からの熱い風が吹いて来ると今まで一面に花を咲かせていた美しい野原が、山々が、一瞬のうちに熱風のために枯れてしまうのです。私たちも昨日まで栄えていた人が、突如滅びてしまう姿を見ています。そのように神に頼らない人々の最後は突如熱風に吹かれて枯れて行く草花のようになるのです。神は、私たちに熱風が吹いて来ても大丈夫なように様々な「試練」を通して訓練して下さるのです。「試練がやって来た時に旧友がやって来たように喜んで迎えなさい」と言われるのです。

5. **試練と誘惑の違い**

13～15 節に「**だれでも誘惑されているとき、神に誘惑されていると言ってはいけません。神は悪に誘惑されることのない方であり、ご自分でだれかを誘惑することもありません。人が誘惑にあうのは、それぞれ自分の欲に引かれ、誘われるからです。そして、欲がはらんで罪を生み、罪が熟して死を生みます。**」とあります。「誘惑」は神から来るものではなく、自分の欲から生じるものです。ギリシア語では、「試練」という言葉と「誘惑」という言語は、同じ言葉です。そのため、誤解する人が多かったのです。ギリシア語で「ペイラ」と言います。「ペイラ」を理解することで、聖書の人物が経験した「試練」と「誘惑」についての洞察が得られ、信仰、回復力、及び神の目的の本質について学ぶことができます。

「ペイラ」の定義は、①試練、経験、試み ②物事を試みること、物事や人を試してみること ③何かを試してみる ④経験する、経験によって知ることを学ぶ

神が与えて下さる「試練」と悪魔が与える「誘惑」というのは、言葉は同じであっても全く違うものです。神は「試練」を与えますが、悪魔は「誘惑」を与えるのです。神が「試練」を与える時は、内側から良いものを引き出すために良い結果をもたらす為に、私たちに「試練」を与えてくださいますが、悪魔が私たちを「誘惑」する時は、私たちを徹底的に駄目にする為に「誘惑」をするのです。私たちが、「誘惑」にあった時に神によって「誘惑」されたと言ってはいけません。「誘惑」の源は悪魔であり、私たちが欲におびき寄せられて、欲がはらむと罪を生み、罪が熟すると死を生むと書かれある状態がそこに出来上がるのです。

イエス様は「誘惑」に遭ったことがありますか。聖霊が下った後、荒野で悪魔の「誘惑」に遭いました。その時イエス様を荒野に導いたのは誰ですか。「**御霊に導かれて荒野に行った**」と書かれてあります。しかし、そこ「誘惑」したのは聖霊ではありません。悪魔です。つまり聖霊はイエス様に「試練」を与えることを良しとされました。この「試練」の中でイエス様を「誘惑」したのは悪霊です。その「誘惑」に打ち勝つことを通して、神はイエス様をまことの救い主として宣言しようとされました。しかし、悪魔がイエス様を「誘惑」した時、イエス様を駄目にしようとしたのです。神は、私たちに「試練」を与える時に私たちの内側から最高のものを引き出そうとされているのです。

あなたの人生を振り返りで見て下さい。今振り返って良かったなという出来事。あなたの内側に今ある性質の中で私はこの性質が好きだ。振り返って見るならばそのような性質は、あなた自身の「試練」の中や生まれて来た性質ではないでしょうか。私の内側にある性質の中で自分のこの性質が好きだと思うのは、実は「試練」を通して神があなたに下さったところの人生の実ではありませんか。しかし、私たちは成功を通しては、驚くほど自分の内側に誇れるところの性質を身に着ける事が出来ないということを知るのです。ここがキリスト教とご利益宗教の違うところです。神は私たちを本気で扱って下さるのです。ですから、ヤコブは「試練」の中を戦おうとしている自分の同胞たちのことを思いながら「試練」は辛い、「試練」には戦いがある。「試練」を通して忍耐が生まれ、忍耐を働かせると完全な信仰者に成長するのだからがんばって行こうと励まし、呼びかけたのです。この「試練」の中に神の愛を見上げながら、「試練」を歓迎しながら歩んで行く者とされて行きましょう。

17 節に「**すべての良い贈り物、またすべての完全な賜物は、上からのものであり、光を造られた父から下って来るのです。父には、移り変わりや、天体の運行によって生じる影のようなものはありません。**」とあります。この節の表現は、輝きに満ちている神の御許にはどこにも影がないので神の光から逃れて隠れることはできないという大切なことを私たちに思い出させます。そして、すべての出来事の背後には神の摂理があると知ることによって、私たちの人生に対する態度も変わってきます。様々な出来事はでたらめに起こるのではなく、それぞれに意味がある、こう考えることで、自分の人生に起きる出来事への応答も変わってきます。伝道者の書 7 章 14 節は「**順境の日には幸いを味わい、逆境の日にはよく考えよ。これもあれも、神のなさること。後のことを人に分からせないためである。**」と述べています。私たちの人生をコントロールしているのは私たち自身ではなく、偶然でもなく、神なのだ、このような視点を持つことこそ神の知恵を持つのです。